

## 巻 頭 言

前雑誌「数学」編集委員長・東京大学名誉教授

片岡 清臣

今年の6月、雑誌「数学」の編集委員長（以下、編集長）を卒業し、無事、後任の方に引き継ぎました。「数学」の論説はその時代に話題となっている数学理論の当事者かつ日本語による大学院レベルの解説である、という意味は非常に大切であると思っていましたが、定年真近となった2年前にこの仕事を打診された時は正直務まるのか、と不安がありました。しかし数学会関係の重い仕事は引き受けたことがなかったので最後の御奉公という意味もありお引き受けしました。もっとも編集の仕事だけではなく埋め草（275字から975字ぐらいのバリエーションあり）を書かなくてはならないという業務もあり、まあ、学生時代現代国語や感想文などの作文が超苦手だった身としては大変苦労しました。これについては日頃から題材になりそうな話題を書き溜めておくことで何とか凌ぐことができました。他方、編集長の通常業務に関しては、論説・書評の完成原稿が数年前危機的に少なくなり、発行できなくなるぎりぎりの状況に追い込まれたことがあるので、そうならないようにくれぐれも注意してくださいと福井敏純前編集長から念を押されました。実際、前編集長は、引継ぎの直前に書評の提案のアンケートを行い、御自身でも4件の提案をされていて編集部としては大変助かりました。引継ぎ後は、9月の総合分科会での編集委員会のみであった提案アンケートを、9月は主に論説等の提案アンケート、3月は年会での編集委員会で書評の提案アンケートを行うように業務スケジュールを改めました。また編集業務での遅滞がないように一日中メールのチェックを怠りなくすると同時に提案者やレフェリーに原稿が渡るように努力致しました。お陰様で2年経ったところで掲載待ちの原稿が論説・企画で21件が24件、書評で6件が14件にそれぞれ増えました。この他提出待ちの原稿まで含めると全部で90件だったものが112件に増え、編集業務にそれなりに余裕ができた状態で新編集長に引き継ぐことができたと思います。これはひとえに編集委員を始め執筆やレフェリーを引き受けて下さった先生方、及び即座にメール送受信をして下さった秘書の方などの御協力の賜物です。ただし逆に今年の編集委員会で掲載待ちの原稿が溜まりすぎているのではないかと、という指摘があったり、また著者からの掲載予定の時期の問い合わせも多くなりました。早速過去の論説原稿についてレフェリー完了から掲載までの期間を調べたところ、受賞関係のものやレフェリー終了までに既に長時間かかっているものを除くと、最近のものでは例外なく12カ月以上かかっていることがわかりました。そこで昨年秋の論説提案からは、採用の条件を止むを得ず厳しくいたしました。今後もこのような厳しい制限がしばら

く続くのではないかと予想していますが以前危機的状況に陥った時も、それ以前は掲載待ち原稿の状況に余裕があったそうなので、慢心していると再び掲載原稿が不足するという事態に陥る可能性もあります。常にコントロールが必要なのかもしれません。

その他原則月1回開催していた常任委員だけの会議についても委員の皆様の負担軽減や経費節約を目指し、特に議題のない月は中止とさせていただきました。具体的には3回程度でしたが、これは私自身が途中から理事に選出され財務・会計担当となっていて、昨今の会員数の減少からくる基礎的収益の減少傾向を知ったということもありました。

以上の様に編集長の仕事は依頼原稿に基づくこともあって通常のジャーナルより大変ですが、他方で数学全分野の最新の話題に関する論説などにいち早く接することができるという余禄もあります。勿論専門外の論説が殆どで、ざっと目を通すだけでも困難な内容である事が多いですが、編集長でなければおよそ目を通す機会もない分野のものでも見る必要があります。実際いくつかの専門外の論説で自分の研究のヒントになったものもありましたし、そこまでいかなくても他分野でどんな研究が行われているのかを知る良い経験をさせていただきました。これは以前東大数理のジャーナルの電子化担当をしていた時も感じたことですが、各電子ファイルの書誌情報を作る時タイトルや掲載ページが書いてある最初のページと提出日が書いてある最後のページを見る必要があります。その時、大急ぎでページをスクロールするのですが標数正の整数論の論文なのにあるページを見ると微分の記号はもとより勾配ベクトル場のような記号もあって、一見すると大域解析の論文のように見える論文もあり大変驚いたことがあります。私の専門は佐藤超関数なのである程度代数的な記号には慣れていますが、これには本当に驚きました。ましてや「数学」の論説は日本語で書かれているので数学記号だけでなく漢字熟語がすぐ目に入り、ざっと見るだけでも印象把握のスピードが速いのではないかと思います。

最後になりますが私の編集長在任中に日本数学会は70周年を迎えることができました。その企画記事を京都大学数理解析研究所の森重文先生に対談形式でお願いしましたが（「数学」第69巻第3号掲載）、日程の都合で私自身が対談を録音しに先生のお部屋へ伺った時のことです。本棚に東海高校の卒業文集があったのが真っ先に目に入り、高校生の時の受験雑誌「大学への数学」の学力コンテスト最優秀者欄でいつも目にしていた「東海高校 森重文」の思い出が蘇りました。私は学年が1つ下でしたが今でもあの頃競争したことはよく覚えています。今年を迎えてこれを機会に高校生に戻った気持ちで数学に取り組みたいとも思っています。